

地域防災力(自助・共助)

— 地震の被害を小さくする住民行動 —

指導時のPoint!

近隣で声を掛け合い、助け合う。一時避難場所では被害を確認し、力を合わせて地域の減災活動。

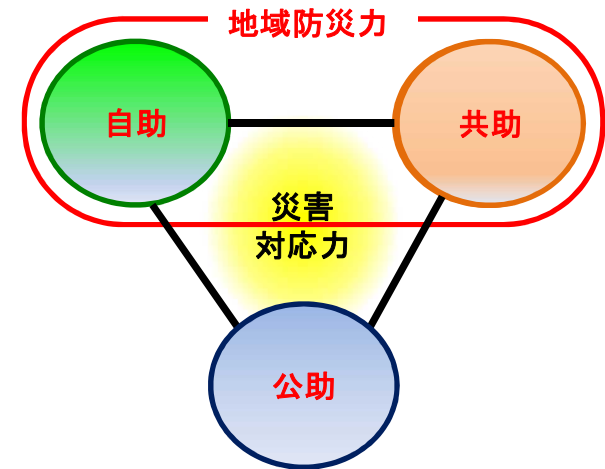
	場所	場面	内 容
自助	自宅	普段	○ 家具の転倒防止等 ○ 家族との話し合い ○ 非常持出し品の準備 ○ 訓練の参加
			○ 自分(家族)を守る ○ 避難路の確保 ○ 出火防止 ※ 避難の際はブレーカーを切る
共助	近隣		○ 相互に声掛け ○ 初期消火など ○ 要支援者配慮 ○ 一時避難場所へ避難 ※ 避難時、ブレーカーを切ったかを互いに確認
	地域 一時避難場所	地震発生	○ マンパワーの集結 ○ 逃げ遅れの確認 ○ 被災状況の確認 ○ 消火等の減災活動 ○ 要支援者配慮
	学区 指定避難場所		(学区対策本部として活動)

『一時避難場所』の重要な役割

自治会などで決められている「一時避難場所」に地域住民が集まる理由は、指定避難場所に避難する前に、地域で発生、若しくは発生しようとしている被害を確認し合い、これらの被害の初期段階で対処するためです。

この「一時避難場所」に防災倉庫の設置が望まれるのも、直ちに人命救助などの活動にあたれるようにするためです。

大津市防災リーダー ハンドブック



QRコードを読み取ると、デジタルブックで読めます。

※ 本書中のQRコードを読み取ると、動画を見ることができます。



大津市消防局

「もしも」に備える

— 地域防災力の充実強化 —

目次

「もしも」に備える	1
基礎知識① 指導者の心構え	2
基礎知識② 安全管理の基礎	4
基礎知識③ 安全管理の知識	6
消火① 消火器	8
消火② バケツリレー	10
消火③ 消火栓	
—1 器具の使い方等	...12
—2 合図・放水・注意	...14
救助① 災害時ファーストコンタクト	
—1 基礎知識	16
—2 救助(てこの原理)	..18
—3 救助(姿勢等)	20
—4 応急手当	22
防災教育 地域で子供を育てる	..24
持出し品 災害の備えチェックリスト	..26
メモ	28
QRコード	29
地域防災力(自助・共助)	裏表紙

1 自然災害からの課題と教訓

- (1) 想定を上回る自然災害の発生と大規模災害の切迫
近年、大雨による災害は頻発し、その被害は大規模・広域化し、大地震の発生も危惧されています。

こうした災害環境の中、次の課題があります。

⇒ 行政による対応のみでは限界

⇒ 住民自身・相互の活動を整えるかが今後の課題

- (2) 災害時の被害を小さくするために

過去の災害からも、地域で支え合う普段のコミュニティ力が、災害時にも大きく関わると言われています。

⇒ 地域の支え合う関係づくりが必要

2 大津市消防局が目指す地域防災力の強化

- (1) 目標

地域の自助・共助を向上させ、地域防災力を強化する。

- (2) 構想

① 市民一人ひとりが防災に関心を持っていただくこと。

② 既に地域防災活動の要となっている自主防災組織を中心に地域の防災関係団体が連携して防災活動を活性化していただくこと。

- (3) ハンドブックの活用について

本ハンドブックは、学区や地域で活動いただく大津市防災リーダーの皆様にご所いただき、自らの防災知識等の習得は勿論、各種訓練時に活用いただくことを目的としています。

内容の多くは地震を想定したものとなっていますが、訓練時の会話や声の掛け合いなどにより、地域の支え合う関係づくりにお役立ていただければと考えます。

指導者の心構え



1 指導に携わる際の配慮

次のことに配慮する。

～事前準備～

- 複数人数で指導にあたる場合は、事前に訓練の目的を確認（共有）すると共に、担当や役割り分担、時間配分を決めておく
- 安全に配慮した場所の選定や配置
- 使用する訓練資器材の準備と点検
- 指導に携わる全員の身だしなみの確認
- 必要に応じた準備運動

～訓練中～

- 「暑い(寒い)」「説明が長い」など参加者がネガティブな思考にならない配慮
- ポイントを押さえた説明と実技指導
- 目配り・気配り
- 風上から通る声で話す
- 資料の棒読みにならない
- 「話す」「見せる」「実技」「質問」「まとめ」とメリハリのある指導

～訓練後～

- 訓練参加者全員の体調確認
- 使用資器材の確認と後片付け
- 帰宅までの安全配慮

2 必ず伝える事項

必ず、次のことを伝える。

～怪我の防止～

- 災害現場は、想像もできない危険な場所。
「活動中の怪我は仕方がない」で始まらない。
訓練中から「怪我をしない・させない」を伝える。

～助けを呼ぶ～

- ひとりではどうしても出来ないことでも、人が集まり力を合わせれば、解決できることが沢山ある。
災害時は、大きな声で助けを呼ぶことを伝える。



～退路の確認～

- 初期消火で建物に入ったところ煙にまかれ…
過去には、このような不幸な事案がニュースになったことが何度もある。
火災だけでなく、災害現場での活動には、必ず危険が伴うことを認識する必要がある。
退路を常に確保（確認）し、危険を感じたら直ちに屋外（安全な場所）に避難することを伝える。

安全管理の基礎



1 安全管理とは

阪神・淡路大震災では、建築物などに閉じ込められた人のうち、生存して救出された**約95%**の人が自力又は家族や隣人などに助けられたと言われている。

災害発生時の地域住民による初動対応はとても重要で、しかも、その活動は余震の発生など、災害現場には多くの危険要因が在る中でのものとなる。

「安全管理」とは、自らは勿論、一緒に活動する仲間の安全も確保できるようにすることで、二次的に発生する事故を防止することと言う。

2 安全管理の徹底

絵は、大地震により倒壊家屋が発生し、余震の発生が予想される中で、人を救出するため、様々な活動が同時進行で行われている。では、危険をどうして察知できるのでしょうか？



指導時のPoint!

チームで活動・安全管理を行うことを徹底しましょう。

3 安全管理の基本

(1) 服装

安全管理の基本は服装！

- ◆ ヘルメットの着用
- ◆ 長袖シャツ、長ズボン
- ◆ 手袋の着用
- ◆ 長靴等（できれば踏抜き処置がされているもの）



指導時のPoint!

普段の訓練時から災害現場の活動に相応しい服装を徹底しましょう。

(2) 危険要因の排除

倒壊家屋の中に人が取り残されていることが分かっている場合でも、二次的な事故を発生させないためには、先ず危険要因を排除すること。

危険な要因を排除の後、救助などの活動を行うことが重要である。

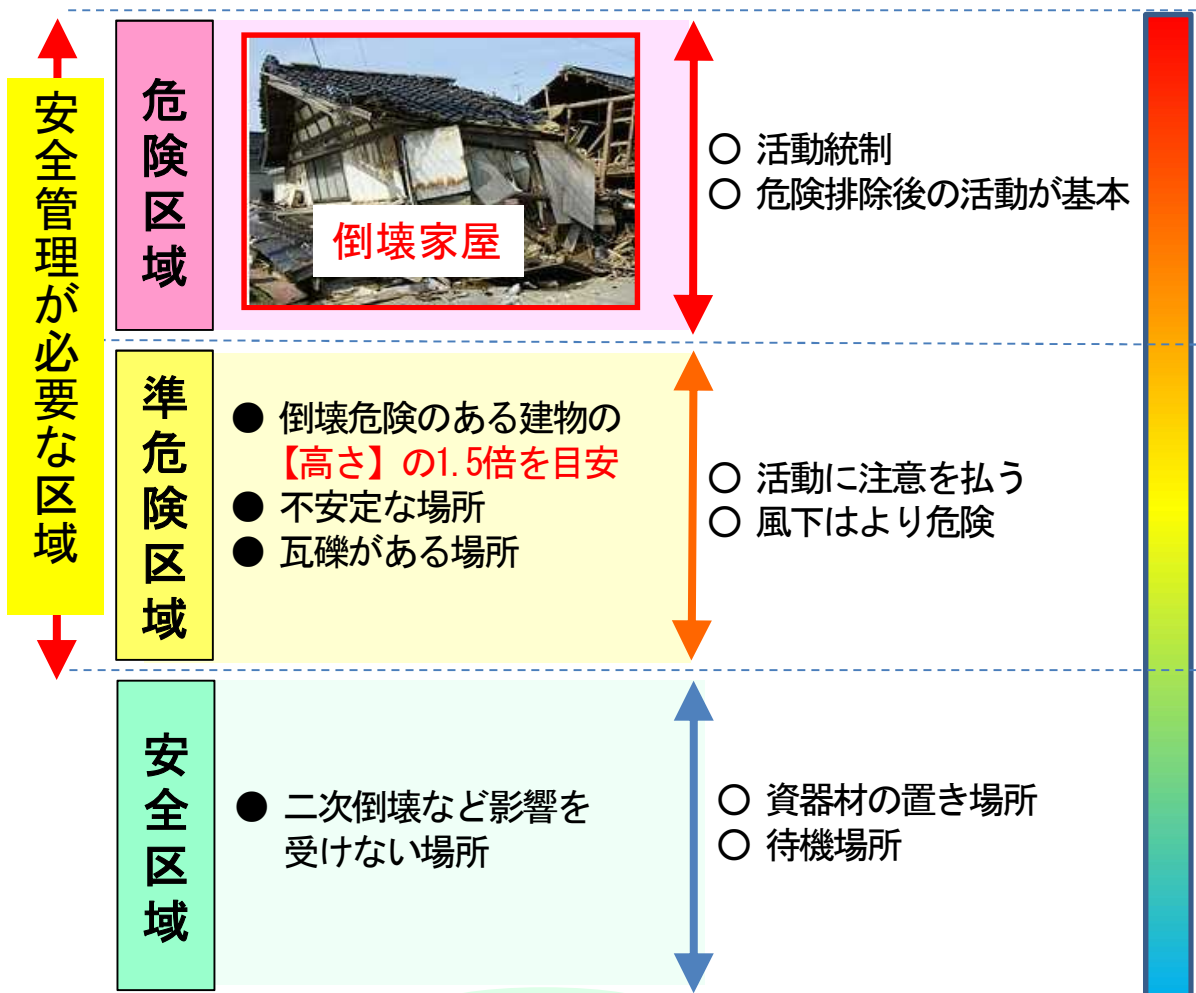
- ◆ ガスの閉栓等による**出火防止** **【第一優先】**
- ◆ 転倒・落下危険のある柱や梁（はり）
- ◆ 不安定なコンクリート片
- ◆ むき出しの鉄筋
- ◆ 踏み抜き危険のある釘等
- ◆ 割れたガラス



1 ゾーニング

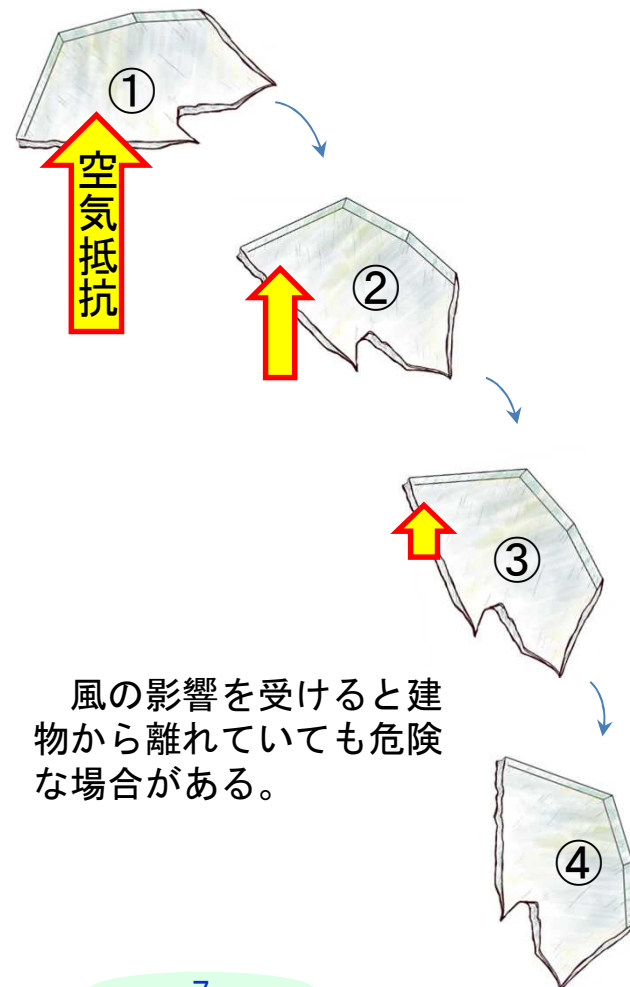
指導時のPoint!

特に安全管理が必要な区域は、危険区域と準危険区域です。
区域をロープ等で明示するとイメージがわきます！



2 落下物(ガラス・瓦)の危険性

ガラスなど平たいものが落下する際は、空気抵抗を受けにくい尖った側を下にして落下する。高所から落ちてくるガラスの破片は、道路に刺さることもある。



消火器 (初期消火の基本)



1 訓練用消火器 (水消火器)

環境への配慮から、大きな火を粉末消火器で消すといった消火訓練は、実施できなくなっている。

このことから、訓練用消火器 (水消火器) を使用した消火訓練となっている。

2 消火器の説明

消火器には、図のようなラベルが貼られている。これに基づき、消火器の説明を行うこと。



引用：モリタ宮田工業株式会社

一般的な消火器に書かれている例

- 消火可能な火災種類 (普通・油・電気火災)
- 放射距離 (3～6 m)
- 放射時間 (約 15 秒)
- 使用方法

指導時のPoint!

早くから消火器を操作すると、火災現場到着までに消火薬剤がいきってしまっていて、消火活動ができなくなってしまう。消火薬剤の放射距離などを説明し、消火器による正しい消火方法を伝えましょう。

3 訓練の流れ

～火災の発生を知らせる～

- 「火事だ～」と大きな声で知らせる
- 119番通報を依頼する

～消火器を持って火災現場へ～

- 自分の退路を考えて火災現場へ
- 煙を吸うと意識を失うこともある

～消火活動～

手順は次のとおり



指導時のPoint!

- 火元 (火災現場) から 5 m 程度離れて操作をすることを説明。
- 火が天井に到達していれば、消火は困難。避難することを説明。
- 消火活動は、避難口 (退路) を背にして行うことを説明。



1 阪神・淡路大震災の教訓

阪神・淡路大震災（1995年1月17日、兵庫県南部地震）では、多くの火災が発生したため、河川などを水源にした住民によるバケツリレーが各地域で行われた。その際の教訓は・・・

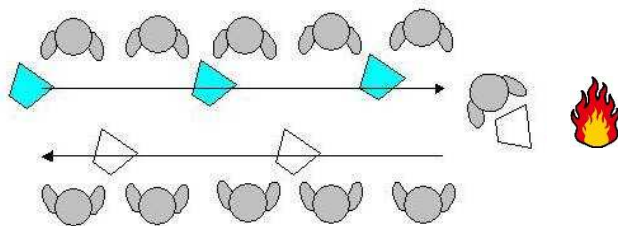
- ◎ コンクリートで固められた浅い川底であったため、簡単に水が汲めなかった。
- ◎ 足場の悪い斜面で不安定な状態でバケツリレーをした。
- ◎ 持ち手のないバケツでリレーをする必要があった。

これ以外にも、自然水利を取水するためには、落水などの危険にも配慮する必要がある。

これが“正解”というものではなく、水量・水深・足場の良否など様々なことからベスト（ベター）な判断で、二次災害のない活動を行うことが大切で、そのためにも様々なシチュエーションを想定した訓練が必要である。

2 バケツリレーの基礎知識

隊形の例



- ◆ 男性は水を入れたバケツをリレー
- ◆ 女性や子供は空のバケツをリレー



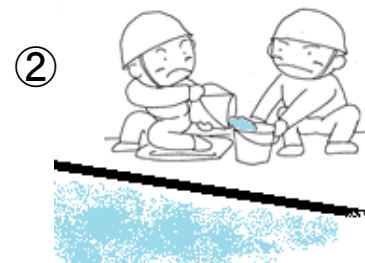
- ◆ バケツの水量は5～6割程度
- ◆ 握る位置は絵のとおり
- 水を掛ける際は、底に手をそえる

3 取水時の注意

防災訓練などで行うバケツリレーは、事前準備されている水槽を水源とし消火活動ができるが、実際はそう容易く水源があるものではない。では・・・

－ プールの水を取水する例 －

- ① バケツの取っ手部分にロープを結着し、取水（※）
 - ※ 片ひざをつくことで腰への負担を軽減
 - ※ ひざの下に毛布を敷くと良い
- ② 汲み取った水を別に準備したバケツにあける

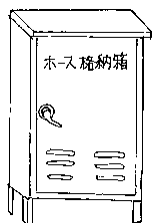




1 消火栓ボックスと消火栓

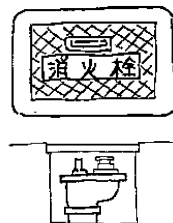
地震で断水をしていない限り、上水道に設置された消火栓は使用可能で、燃えている建物などへの消火は大変有効となる。但し、放水時の圧力が強いことなどから、複数人数（4人以上）の操作が必要である。

消火栓ボックス



中には

消火栓



(断面図)

使い方

消防用ホース
2本又は3本
(1本の長さ20m)

筒先

スタンドパイプ

受け金具

差し金具

消火栓ハンドル

消火栓ハンドル

(※) 左に回すと水が出る。
右に回すと水が止まる。

筒先

スタンドパイプ

ホース20m × 2本 = 40m

バルブ

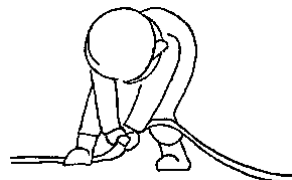
※注意：バルブの開け閉めはゆっくり行い、放水している人の状態を確認しながら少しずつ水を出す。

2 つなぎ方・はずし方



【ホースや筒先のつなぎ方】

ホースの差し金具がやや上に向くように足で踏み、このホースの差し金具に、ホースまたは筒先の受け金具をつなぎ、確実につながったかを引っ張って確認する。

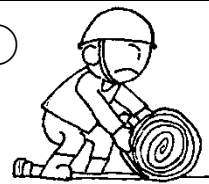


【ホースのはずし方】

ホースをはずす場合は、つなぐ時と同じように差し金具付近を足で踏み、差し金具の離脱環を両手で引く。

3 ホースの延ばし方

①



前方に人が居ないか確認！

ホースを立て、右手で差し金具を持ち、左手はホースに添え、右足で受け金具付近を踏む。



延ばす方向を決め、ホースを前に転がして延ばす。

②



③



差し金具を右手に持って、延ばす。



4 合図

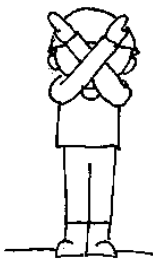
「放水はじめ」
右手を真上に



「放水やめ」
右手を水平に



「収納」
両手を交差



合図は「声」と一緒に、「手信号」により行う。

指導時のPoint!

次のようなポイントを押さえた指導をしましょう!

※ 消火栓から放水すると、水の濁りが発生することがあるので訓練では実際に消火栓から放水することが出来ない。
有事に備え、ホースの延ばし方や器具の結合方法などを指導する。

【バルブ開け閉めを担当する人へ指導】

- ・ 消火栓の蓋は鉄製でとても重く、手や足を挟んだり、腰を痛めないように注意。
- ・ 「放水はじめ」の合図があるまでバルブを開けないこと。
- ・ バルブの開け・閉めはゆっくりと行うこと。
- ・ 安全な放水圧力に保てるよう、バルブの開け閉めで調節すること。

【ホースを延長する人への指導】

- ・ ホースは、消火栓側が受け金具、火災現場側が差し金具となるよう延ばすこと。
- ・ ホースや筒先をつないだ時は、「カチッ」という音と、金具付近のホースを引っ張って結合していることを確認すること。
- ・ 延ばしたホースに、「折れ」や「ねじれ」がある場合は直すこと。
- ・ 「放水はじめ」「放水やめ」の伝令担当を決め、伝達後は、放水する人の後方でホースを保持すること。

【放水をする人への指導】

- ・ 燃えている物（家や車など）に近づきすぎると大変危ないこと。
- ・ 原則として風上から放水し、安全な場所を選んで放水すること。
- ・ 放水中は、筒先を絶対に放さないこと。
- ・ 後方でホースを保持してくれる人と協力して、一緒に放水すること。

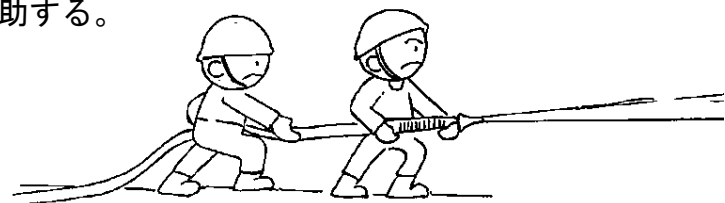
5 放水

【筒先を持つ人】

筒先の取っ手を右手で持って腰にあて、左手で筒先の金具付近を握って火元に向け、左足を一步踏み出した前傾姿勢でしっかりと構える。

【筒先を補助する人】

筒先を持つ人が動きやすいようにホースの反対側の1～2歩うしろでホースを持ち、腰をやや落とした前傾姿勢でしっかりと補助する。





1 チーム活動と危険認識・排除

(1) チームで活動することが基本

○ 指揮を執るリーダー

活動には加わることなく、全体の危険要因に気を配る

○ 活動する人（メンバー）

自己の安全管理に配意しつつ、指揮者の管理下で活動

※リーダーと活動する人（メンバー）は、声を掛け合いながら危険要因の排除など活動する。

(2) 倒壊家屋にある危険認識

○ 直接的な危険

割れたガラス、むき出しの鉄筋や釘

※ 尖った先に、空のペットボトルを被せる。

○ 二次的な火災を発生させる危険

コンロやガス、電気など

○ 余震による危険

柱や梁（はり）などの転倒・落下など

※ 柱など排除しきれない不安定なものがあれば、ロープを使って固定する。（絵は「巻き結び」）



2 生存者を探す

生き埋めになっている人を探し出すのは容易ではない。

活動する人たちの大きな声や音は時には障害となり、体力の弱った人が出す音（声）を聞き分けることができない。

活動する者（メンバー）全員が「**サイレントタイム（完全な静かな状態）**」を作り、生存者の出す僅かな音や声に耳を傾け、徐々にその範囲を狭めながら探す。

3 資器材 《長尺バールを使った救助》

(1) 救出するために必要な活動：重量物の落下防止措置

倒壊家屋から人を助けるために、挟まれている部分に隙間を作る必要がある。

不安定な重量物を揚げながら落下防止措置を施して、救出に必要な空間を作る。

(2) 落下防止措置に必要な資器材

① 4 × 4 インチ（10cm角）の木片

② 2 × 4 インチの木片

③ 一边をくさび型にした木片

※ 各木片の長さは45cm程度

※ 材質は、杉材・松材

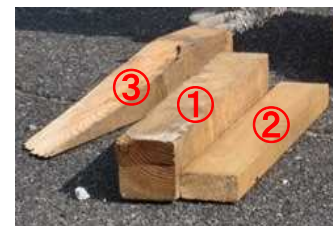
④ 長尺のバール

(3) 置き方

活動に必要な全ての資器材は活動し易い位置に集結させ、正しく置く

指導時のPoint!

置き方を誤ると、踏み付けにより資器材が跳ね上がる。



(4) その他（車のジャッキ等の使用について）

バールに代えて、乗用車などに積んでいるジャッキなどを使う場合は、事前に取扱説明書で「許容荷重」等の諸元性能を確認して安全に使用すること。

なお、ジャッキを使用する場合でも、この後に説明する「落下防止措置」は必要である。



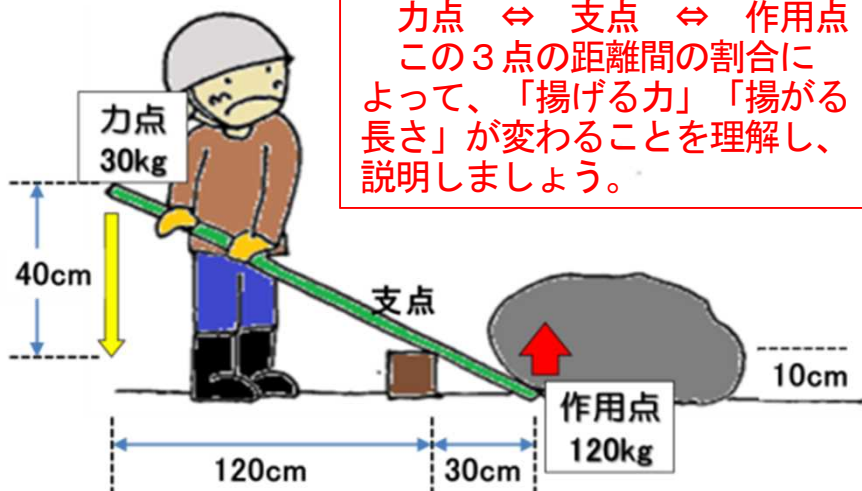


1 「てこの原理」の基本

力点に加重することで、木片を使用した支点の反対側（作用点）で数倍の力が発揮できる。

指導時のPoint!

力点 ⇔ 支点 ⇔ 作用点
この3点の距離間の割合によって、「揚げる力」「揚がる長さ」が変わることを理解し、説明しましょう。



人力による「てこの原理」の限界

バールを用いて「てこの原理」を使って、人力で重量物の一辺を揚げる限界は、1, 200kgです。

重量（目安）

重量物の材質とその大きさから重量を予測して、「てこの原理」で揚げるができるのかを判断できます。

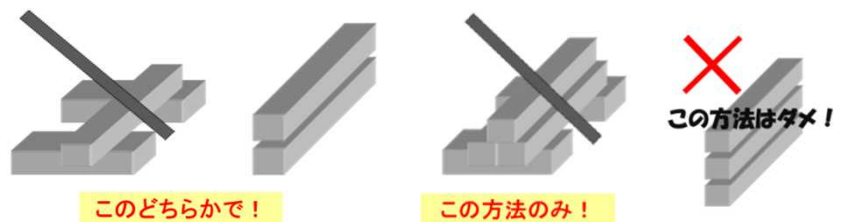
- 木材 1㎡ (1×1×1m) の塊 ⇒ 640kg
- コンクリート 0.5㎡ (1×1×0.5m) の塊 ⇒ 1200kg

2 支点の作り方

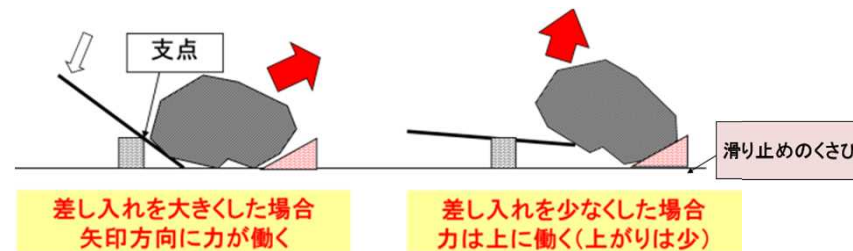
(1) 支点には、木片を使う。積み上げ方は次のとおり。

① 2段積みの場合

② 3段積みの場合



(2) 支点の位置が変わると、重量物の上がり方が変わる。

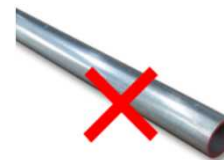


3 支点到に適さない資器材

(1) コンクリートブロック

(2) 工事用の単管

いずれも荷重に耐えれなくなると、前兆無く一気に崩壊（座屈）する。





4 重量物を揚げる際の姿勢

バールの操作は、正しい姿勢で一人で行う。
複数箇所を同時に揚げる場合も、息を合わせて、それぞれ一人が一本のバールを操作する。
揚げるときより下ろすときが危険。

(1) 正しい姿勢

バールは握らず、
上から押すように



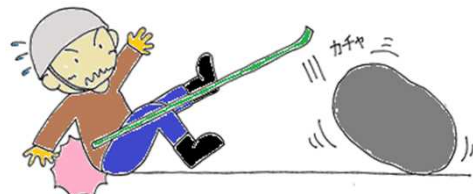
バールに全体重
をあずけない。
体を被せるような
姿勢をとらない。

(2) 誤った姿勢

バールを
握っている。



体を被せている。
バールに体重を
かけている。



すかされた場合、大怪
我につながる。

指導時のPoint!

正しいバールの持ち方と姿勢を伝えましょう！

5 落下防止措置

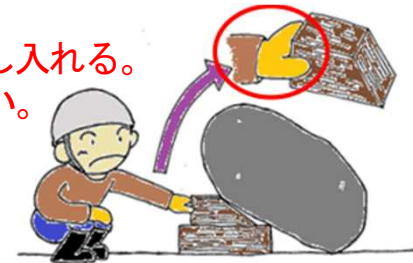
重量物を揚げたあと、必ず落下防止の措置が必要。
落下防止には木片を使用するが、重量物の直下で行う措置のため、次のことを守りながら、実施すること。

(1) 息を合わせた活動

リーダーの合図とともにバールを操作する人と、落下防止の措置を行う人は声を掛け合い、息を合わせながら活動する。

(2) 木片の持ち方と差し入れ方

木片は、横から持ち、横から差し入れる。
絶対に重量物の下に手を入れない。



(3) 重量物の落下防止と安定化

バールを用いて重量物を揚げている間に、もう一人が隙間に木片を差し入れる。

重量物との隙間の大きさに見合った木片を差し入れ、その上部には更にくさび型木片を入れ、重量物がより安定するようにする。この後、バールを操作する人はゆっくりと下ろす。

指導時のPoint!

大きく揚げることが目的ではなく、少しずつ揚げその隙間に落下防止を。揚げる位置を換えながら、徐々に隙間を広げていくことが重要です。





1 救出

二次災害防止を考えた活動を行う。

- 落下防止の措置が取られた重量物でも、余震などによりバランスが崩れる危険性がある。
怪我人の救出は外側からの活動を基本とし、可能な限り重量物の下には入らない。
- 安全区域に救出するまで、気を緩めない。
- 他に生き埋めがないことを確認できれば、倒壊家屋には近付かない。
- 安定化に使った木片以外の資器材は、次の活動に備えて怪我人の救出と同時に安全区域まで搬出する。

2 搬送

(1) 一人で



- 負傷者の両脇から腕を入れ、負傷者の前腕を両手で保持する。
- 負傷者の片足を反対側に重ね、後ろ向きに搬送する。
- 短い距離の搬送とする。

(2) 二人で



- 頭側は(1)と同じ。
- 足側は、手前になる側の負傷者の足をもう片方の足に重ねて、両手で保持する。
- 長い距離の搬送とする。

3 応急手当

救急訓練に参加し、止血処置などができるよう知識と技術を普段に習得しておく。

次のような応急処置を施す必要がある怪我人は、出来るだけ早期の医療機関への搬送を行う。

(1) 止血

大出血（大量の出血）があれば、第一優先で行う処置。

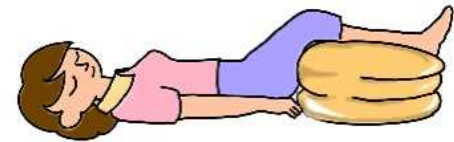
止血することにより、血圧の安定などにつながる。



(2) ショック防止

顔色が蒼白い、呼吸が浅く速い、手足に冷汗がある、唇が紫色などを認めたらショックを起こしている可能性がある。

足部を上げるようにして寝かせるショック体位をとる。



(3) 保温

ショックを起こしている怪我人には、毛布等で保温し体温の低下を防ぐ。





1 防災に関心のある子供を育む

子供は置かれた環境で育つ。例えば、防災に無関心な社会環境の中で、防災に関心を持つ子供が育つわけがない。

10年経てば大人になり、さらに10年経てば親に…子供たちへ災いをやり過ごす知恵や言葉を伝え、これを世代間で継承させ、地域に文化として定着させましょう！

～防災教育（避難訓練）の現状～

授業中、突然の地震発生、の放送を合図にグラウンドに避難…『押さない』『走らない』『しゃべらない』と、定番の避難訓練ばかりしていませんか。

～防災教育の考え方～

- ◎ 災害は、いつ・どこで発生するか分からない。学校の行き帰り、自宅に一人で居るときなど、大人から離れていても、自らの命を災害から守れるように、子供たちに伝える。



- ◎ 災害が起こった際に周囲の人々と助け合おうとする心が育つよう、発達段階に応じた行動を伝える。

- ◎ 地震や風水害などすべての災害から身を守る知恵を、次の世代に受け継げるようにする。



2 年齢層に見合った行動目標

地域全体で、子供の年齢層に見合った行動目標により、災いをやり過ごす知恵を伝える。

- 就学前児 **《安全行動の基礎》**
“先生（大人）の言うことをよく聞き、自分の身を守ることができる”
- 小学校低学年（小学1～3年生） **《自分の安全》**
“指示がなくても、身の安全が取れる”
- 小学校高学年（小学4～6年生） **《身の回り》**
“小さな子供やお年寄りを気遣うことができ、先生（大人）に協力できる”
- 中学生 **《社会全体》**
“被害を小さくするための活動が自発的にでき、学校や地域の力になる”

3 地震から身を守る姿勢【基本】

指導時のPoint!

頭を守ることを伝えましょう！

机の下に入る

机の脚の上方を持ち、力を下方に入れることで、机が安定する。



ダンゴムシの姿勢をとる

机などない場合は、ダンゴムシの姿勢で、頭を守る。





1 避難の際に持ち出すもの

- ☐ 水・食品（最低3日分）
- ☐ 軍手
- ☐ 衣類・下着
- ☐ 洗面用具（歯ブラシ含む）
- ☐ タオル
- ☐ ペン・ノート
- ☐ レインウェア
- ☐ 懐中電灯
- ☐ 携帯ラジオ
- ☐ 予備電池・充電器
- ☐ マッチ・ろうそく
- ☐ 救急用品（絆創膏・包帯・消毒液・常備薬等）
- ☐ 防寒用品（使い捨てカイロ・ブランケット）
- ☐ 生活用品（ティッシュ・ラップ・ゴミ袋等）



～ 感染症対策 ～

- ☐ マスク
- ☐ 手指消毒用アルコール
- ☐ 石けん・ハンドソープ
- ☐ ウェットティッシュ
- ☐ 体温計



～ 一緒に持ち出すもの ～

- ☐ 貴重品
 - ☐ 通帳 ☐ 現金 ☐ パスポート ☐ 運転免許証
 - ☐ 病院の診察券 ☐ マイナンバーカード 等

2 子どもがいる家庭の備え

- ☐ ミルク（キューブタイプ）
- ☐ 子ども用オムツ
- ☐ 抱っこひも
- ☐ 使い捨て哺乳瓶
- ☐ お尻ふき
- ☐ 離乳食（携帯カトラリー含む）
- ☐ 子どもの靴
- ☐ ネックライト



3 女性の備え

- ☐ 生理用品
- ☐ サニタリーショーツ
- ☐ おりものシート
- ☐ 防犯ブザー／ホイッスル
- ☐ 中身の见えないゴミ袋



4 高齢者がいる家庭の備え

- ☐ 大人用紙パンツ
- ☐ 入れ歯／洗浄剤
- ☐ デリケートゾーンの洗浄剤
- ☐ 杖
- ☐ 補聴器
- ☐ 男性用吸水パッド
- ☐ 持病の薬（お薬手帳のコピー）



メモ

QRコードを読み取ると動画を見ることができます。



安全管理



ファーストコンタクト
【イメージ】



消火器・消火栓を
使った訓練



ファーストコンタクト
【落下防止措置】



バケツリレーによる訓練



ファーストコンタクト
【応急手当】

※ QRコードを読み取る際は、読み取る対象以外のQRコードを、自身の手や紙等で隠した状態で、携帯電話等を操作ください。

学区や地域の消防訓練・研修をご検討いただく際は、お気軽にご相談ください。

- | | |
|-------------|--------------|
| ○ 北消防署 | 077-572-0119 |
| ○ 志賀分署 | 077-592-0119 |
| ○ 中消防署 | 077-525-0119 |
| ○ 西 分 署 | 077-579-0119 |
| ○ 南消防署 | 077-533-0119 |
| ○ 東消防署 | 077-543-0119 |
| ○ 予防課(本書製作) | 077-525-9902 |

※ 禁無断転載